

「青きレゾナンスの序章」

大西 冬恭

登場人物

灰戸 奏一朗（15）（17） 男。高校二年生
雛形 碧生（15）（17） 女。高校二年生

永安（37） 男。映画ディレクター兼プロデューサー

金木（17） 女。新聞部

奏一朗の父

奏一朗の母

司会進行の女性

男性教師

奏一朗の友人ら

サッカーをする少年ら

警察官

碧生の担任教師

○街道シネマズ・シアタールーム（回想）

照明が点いた広いルーム内。スクリーンには『第二十三回街道シネマズ学生映画祭 授賞式』の文字が投影。

客席の最前席、映画ディレクターやプロデューサーら審査員が座っている。

舞台袖に立つ司会進行の女性。

司会「続きまして、短編映画部門グランプリ作品の発表です。厳正な最終審査の結果、見事グランプリに選ばれたのは……」

スクリーンの文字、受賞作のタイトルと監督名に切り替わる。

司会「灰戸奏一朗監督による、『時間をつぶすな』です」

会場、拍手が上がる。

司会「なんと灰戸監督は、現在中学三年生と
いうことで、全部門において歴代最年少の
受賞者となりました」

どよめきと歓声、ひと際大きな拍手が
会場に響く。

そんな中、後方の座席に一人で座っている雛形碧生（15）、愕然と目を見開いている。

○雛形家・碧生の部屋（夜）

学習机でノートパソコンに向かっている碧生（17）。
ワードソフトを開き、何かに急かされるように文字を打ち続けている。

○街・遠景／各所（早朝）

夜が明け、白みがかっていく街並み。
駅や繁華街や幹線道路など、各所でちらほらと人々の活動が始まる。
どこかの池で鯉が跳ねる。

○雛形家・碧生の部屋（早朝）

カーテン越しに薄い光。
時計、午前五時過ぎ。
碧生、キーボードを叩く手を止め、腰

を上げる。

ふらふらとベッドに向かう途中、ふと足を止める。

視線の先は、枕元のカレンダー。

カレンダーは三月。月末の欄に『丸山

文庫 小説新人賞〆切』のメモ。

碧生、再びパソコンに向かう。

キーボードに手をのせ、水に潜る前のように息を吸いこみ、止める。

刹那、時計の針が止まる。

そのままキーボードを叩き始める碧生。

○街・各所（早朝）

静止画のように固まっている街。

鯉、中空でピタリと止まっている。

○雛形家・碧生の部屋（早朝）

碧生、止めていた息を吐き出す。

同時に、時計の針が動き出す。

○街・各所（早朝）

何事もなかったように動き出す街。

鯉、ちやぽんと池に落下。

○タイトルバック『青きレゾナンスの序章』

○街道シネマズ・シアタールーム（回想）

灰戸奏一朗（15）、舞台上でマイク
を手に、客席を向いている。

奏一朗「この度はこのような素晴らしい賞を
頂けたこと、大変誇りに思います。本作を
制作するにあたって、様々な紆余曲折があ
りました。出来ないことが出来るようにな
ったら、また次の出来ないことが見えてく
る。その繰り返しでした。大好きなことを
やっているはずなのに、正直、毎日が息苦
しかったです」

自信に満ち溢れた物腰で、一度客席
を見渡し。

奏一朗「僕の首を絞めていたものの正体――

それは、時間でした」

○同・ロビー（回想）

映画祭の関係者らが各々に交流中。

若干ふらつきながら歩く奏一朗。

そこへ永安（37）が握手に来る。

永安「やあ。とても素晴らしい作品だったよ」

奏一朗「（立ち止まって応じる）どうも」

永安「野心のない人生に対する、警句めいた

主題性を感じられた」

奏一朗「成し遂げたいことがあるなら、つぶ

せる時間なんて一秒もない。いつも自分に

そう言い聞かせています」

永安「つまり君にはそれがある？」

奏一朗「最高の映画を作りたい。そして皆に

認められたい。それだけです」

永安「人に認められるために映画を？」

奏一朗「じゃないと傑作とは呼ばれないので」

永安、満足そうに頷く。

永安「卒業後の進路は決まっているのかい」

奏一朗「僕としては、創作に専念するために、通信制の高校に通いたいんですけど」

永安「けど？」

奏一朗「親が反対していて」

永安「ああ。じゃあ今日は、頼もしい交渉材料が手に入ったわけだ」

奏一朗「実を言うと、今回の応募はそれが目的で」

永安「今後、君の動向には注目させてもらうよ。すっかりファンになった」

奏一朗「でしたら、次の作品にはご期待ください。ちよつとしたファンタジー映画を作ろうかと」

永安「ほう。すでに構想が？」

奏一朗「もしも僕が、時間を止める力に目覚めたら、という話です」

永安「それは、色んな意味で興味深い。しかし人が何かを得るには、相応の代償が必要になるのでは？」

奏一朗、頷いて。

奏一朗「生命の象徴である活動の一つを、代償にします。それを止めている間だけ、時間を止められるという具合に」

永安「それはつまり？」

奏一朗「呼吸です」

奏一朗、雄弁な笑みを湛えて。

奏一朗「その作品は僕に、クリエイターとして生きていくための揺るぎない自信と信念を与えてくれる。そう確信しています」

○黒画面（奏一朗の瞼の裏）

男性教師の声「……灰戸……起しろ、灰戸！」

○公立高校・進路指導室（放課後）

椅子に座って居眠りしていた奏一朗

（17）、目を開ける。

テーブルの向かいに強面の中年男性教師が座っている。

男性教師「寝ろと言ったつもりはないが」
奏一朗「まさか（涎を拭い）寝てません」

男性教師、ため息をつき、机上に目を落とす。

白紙の進路希望調査票。

男性教師「灰戸、来月から何年生になる？」

奏一朗「三年です」

男性教師「そうだ。で、クラスでこれを出していないのはもうお前だけだ」

奏一朗「そうですか」

男性教師「なあ、将来何かやりたいことはないのか？ 漠然とでいいんだ」

奏一朗「やりたいこと……（窓の外を見て遠い目をする）いや、特には」

男性教師「じゃあせめて、進学か就職かくらいはちゃんと考えろ」

奏一朗「（男性教師を見て）ああそれなら、一応大学には進学するつもりですよ」

男性教師「志望校は？ 学部は？」

奏一朗「あ、そこまではまだ。ただあれです、もつとモラトリウムを謳歌したいですね」

男性教師、額を押さえて首を振る。

男性教師「ビジョンを持って生きている奴らは、その間にどんどん先に進んでいくぞ」

奏一朗「まあ大丈夫ですよ、焦らなくても」

時間なんていくらでもありますから」

覇気のない笑みを浮かべる奏一朗。

○同・奏一朗の教室（昼）

奏一朗、友人らと楽しげに昼食中。

そこへ、金木（17）が近づいて来る。

金木「初めまして。君が灰戸奏一朗くん？」

奏一朗「……誰、あんた？」

金木「新聞部の金木っていうんだけど（廊下の方を指差して）今、ちょっといいかな？」

○同・階段踊り場（昼）

奏一朗と金木、向かい合っている。

奏一朗「俺を校内新聞の記事に？」

金木「そう。それで掲載の許諾と、軽くインタビューも出来たらと思って。ちなみに記事のテーマはこれね」

金木、奏一朗に企画書を差し出す。

表題『ええっ、我が校にはこんな才能
が隠れていたの？ 特集（仮）』。

奏一朗「俺に何の関係が？」

金木「すごい映画監督なんでしょ、君」

奏一朗「……どこでそれを？」

金木「ネットで調べたの。全校生徒の名前を」

奏一朗「勤勉だな」

金木「（メモを見ながら）街道シネマズ――

母体は日本有数の映画配給会社だね。そんなところが主催する映画祭で、君は最高の賞をとった（顔を上げて）それがどういうことか、素養のない私でもわかる」

奏一朗「二年以上も前の話を今さら」

金木「それでも君は、きっと特別な人間だ」

奏一朗、自嘲的な吐息をこぼす。

金木「けどちょっと意外」

奏一朗「意外？」

金木「創作物から、作者のおおよその輪郭は見えるものでしょ」

奏一朗「まあ」

金木「だから私、君はもっとビジネスライクな人間かと想像してた。いつも一人で黙々と、映画の構想を練っているような」

奏一朗「ああ、そういうのはもう必要はないから」

金木「というと？」

奏一朗「あれ以来、映画は作ってない」

金木「え、どういうこと？」

奏一朗「そういうこと。じゃあな」

奏一朗、踵を返して立ち去ろうとする。

その腕にしがみつく金木。

金木「待って、せめて掲載の許諾だけでも！」

奏一朗「ちよっ、離せよ」

金木「もうすぐ来年度の予算案提出がある。

見栄えのいい活動実績が欲しいの」

奏一朗「頼めそうな奴くらい他にもいるだろ」

金木「君なら大企業の名前が使える。それに

比べたらどいつもこいつも三面以下！」

奏一朗「口、悪っ！」

金木「ねえねえいいでしょ。お願いお願い」

奏一朗「おい揺らすな……もうわかったから、勝手に使ってくれ！ 落ちるって！」

○公園（夕）

ベンチに座っている学校帰りの奏一朗。
イヤフォンを耳につけ、スマホで映画を観ている。真剣な顔。

時折映像を停止したり巻き戻したりしながら、手元のノートにストーリーの展開やカメラワークなどをメモする。

公園内でサッカーをしていた少年ら、

奏一朗に近寄る。

少年A「あのー、すみません」

奏一朗、集中していて気づかない。

少年A、奏一朗とスマホの間で手をひらひら振る。

ようやく気づいて顔を上げる奏一朗。

少年A「そのベンチ、ゴールにしたいから退いてよ」

奏一朗「ん？ ああ悪い、今退くよ」

奏一朗、荷物をまとめて腰を上げる。

○灰戸家・外観（夜）

二階建ての戸建住宅。

玄関扉を開けて帰宅する奏一朗。

○同・リビング（夜）

台所で夕飯の支度をしている母。

奏一朗、ただいま、と入って来る。

母「おかえり。今日も遅かったわね」

奏一朗「あー、友達と遊んできた」

母「ほんと毎日ね。お金大丈夫なの？」

奏一朗「大丈夫大丈夫。連れの残り汁で替え

玉頼むだけだから。百円で楽しめる」

母「（苦笑）ちよつとやめてよ恥ずかしい」

奏一朗と母、楽しそうに会話を続ける。

○同・奏一朗の部屋（夜）

学習机で学校の課題をしている奏一朗。

壁際には空っぽの棚が並んでいる。

○公立高校・掲示板前（朝）

掲示板にはられた校内新聞。

その前を素通りしていく生徒ら。

じゃれ合う男子らが掲示板にぶつかり、
新聞が剥がれ落ちる。

ふらふらと歩いてきた一人の女子、新聞に気づいて拾い上げる。寝ぼけ眼の碧生である。

掲示板に留め直しながら、ぼんやりと
記事を眺める碧生。

とある箇所を見た途端、目を見開く。
小題『消えた天才映画監督』、内容は
奏一朗の実績が綴られたのち、現在は
映画制作をやめたという情報まで記載。
記事に釘付けの碧生。

金木の声「わりと面白い企画でしょ」

碧生、声の方を振り向く。

金木が立っている。

碧生「……これ、あなたが書いたの？」

金木「そうだよん」

碧生、金木の両肩を掴んで。

碧生「この男はどこにいるの！」

気圧される金木。

○同・奏一朗の教室（朝）

奏一朗、自分の席で頬杖をつき、ぬぼーっと進路希望調査票を眺めている。

勢いよく教室のドアが開かれ、碧生が登場。

各々に談笑していた生徒ら、しんと静まり返って碧生に注目。

室内を見回す碧生、奏一朗と目が合い。

碧生「（愕然と）いた……本当に」

碧生、大股で奏一朗に接近し、ドンと彼の机に両手を載せる。

奏一朗「（ぎょっとして）いきなり何だよ」
碧生「どうして……どうしてやめたの！」

奏一朗、碧生の気迫にやや気圧される。

また女だぞ、などと囁き合う友人ら。

奏一朗「（彼らを見て）知らねえよ、初対面だ。誰だよあんた（言いながら碧生に向き直り）」

奏一朗、言葉を詰まらせる。

碧生、泣いている。ぼろぼろと零れ落ちた涙が、進路希望調査票を濡らす。

碧生「やめたったってどういうつもり？」

奏一朗「さっきから一体何の話を……」

碧生「あなたのせいで、あの日からずっと私は——うっ！」

碧生、ふいにみぞおちのあたりを押さえ、えてしやがみ込む。苦悶の表情。

奏一朗「えっ（腰を上げ）おい、大丈夫か？」

「うわっ、そういうこと？」と誰かが声を上げ、騒然となる教室。

奏一朗「は？ いやいや、俺は無実だ！」

好奇と軽蔑と心配が二人をとりまく。

奏一朗、困惑の末に碧生の手をとり、逃げ出すように教室を後にする。

○同・保健室（朝）

ベッドで横になっている碧生。

近くに養護教諭と奏一朗が立っている。

養護教諭「本当にもう平気なの？」

碧生「ええ（起き上がろうとする）」

養護教諭「もう少し休んでいきなさい。あなた、最近ちゃんと寝てないでしょ？」

碧生「……（布団をかぶり直す）」

養護教諭「私はちよつと席を外すけど（奏一朗を見て）あなたももう授業に行きなさい」

奏一朗「はい」

養護教諭、保健室を出ていく。

奏一朗、パイプ椅子を出して座る。

碧生、天井を見つめている。

碧生「あなたがこの学校にいたなんて知らなかった。去年の春に転校してきたから」

奏一朗「そうか」

しばし沈黙。奏一朗、貧乏ゆすり。

碧生「時間をつぶすな」

奏一朗の貧乏ゆすりが止まる。

碧生「二年前、私もあの映画祭に参加していた」

奏一朗、背筋を伸ばし、深呼吸をして。

奏一朗「映画、作ってるのか」

碧生「いいえ、私は小説を」

奏一朗「小説？」

碧生「あの時は、とある大学の映画サークルから連絡をもらったの。当時私がネットに投稿していた小説を、長編映画の原作に使用していいか、という打診が。もちろん、喜んで許可したわ」

奏一朗「そりやそうだ」

碧生「結局その作品は、二次審査で落選した。その結果を聞いた時、私は心底誇らしかった。プロを目指す大学生や専門学生が大勢参加している中で、まだ中学生だった私の考えた物語が、一度は認められたのだから」

奏一朗「十分すごいさ」

碧生「あなたにだけは言われたくない」

奏一朗、おもむろに顔を下げる。

○街道シネマズ・シアタールーム（回想）

舞台上で表彰盾を受け取る奏一朗。

拍手が響く中、碧生は微動だにせず舞

台を見つめている。

碧生の声「硬いものでガンと、思い切り頭を殴られた気分だった」

○公立高校・保健室（朝）

碧生、奏一朗に顔を向ける。

碧生「あなたのせいで、あの日からずっと息が苦しい」

奏一朗、顔を上げて薄く笑いながら。

奏一朗「何で俺のせい？」

碧生「消えないの」

奏一朗「何が」

碧生「焦りが」

奏一朗、息を呑む。

碧生「どれだけ書いても、書き続けても、足

りない、まだ足りないと、心の真ん中でそれが叫び続ける」

碧生、興奮気味に上体を起こして。

碧生「だけどその声に従えば、結果が伴なうようになった。ずっと苦しいけど、筆を折ろうと思ったことも、一度もない」

奏一朗、唇を嚙む。

碧生「目指すところはきつと違う。でもあなたは私にとって、一つの目標だった」

碧生、問いかけるように奏一朗を見る。

奏一朗、つばを飲み込み、顔を背ける。

やがて、諦めたように息を吐き。

奏一朗「怖かったんだ」

碧生「（顔をしかめ）どういうこと？」

奏一朗「次の映画を作って、つまらないと思われなくなかった。期待が失望に変わるのが怖かった。それで、なんだ、あれはまぐれだったのかって見下されるくらいなら」

碧生、目をひん剥むき、奏一朗の胸元を掴む。

碧生「本気で言ってる？」

奏一朗、不自然な笑みで碧生を見返す。

奏一朗「何キレてんの。落ち着けよ」

碧生「その気持ち悪い顔をひっこめろ！」

奏一朗「（動揺）」

至近距離で正対する二人。緊迫の沈黙。

碧生、突き飛ばすように奏一朗を解放。

苛立ったように前髪をかき上げ、ベッ

ドから降りて出入口に向かう。

奏一朗、項垂れたまま無言。

碧生、途中で立ち止まり。

碧生「チキンは見た目だけじゃなかったのね。

二度と私の視界に入るな。腐れち菌が移る」

奏一朗、ピクリと肩を動かす。

碧生「あなたにはもう何の価値もない」

奏一朗、目を瞠って顔を上げる。

すでに碧生の姿はない。

奏一朗、舌打ちをして地団太を踏み、

髪をぐしゃぐしゃに掻き乱す。

奏一朗「ふざけんなっ……」

床の一点を見つめ、しだいに呼吸が荒くなっていく。

○灰戸家・奏一朗の部屋（回想・深夜）

映画の構想やプロットやコンテ等を記した用紙が無造作に散乱した室内。
壁際の棚には映画のパッケージがぎっしり詰まっている。

中学三年の奏一朗、机に両肘をついて頭を抱え、肩で息をしている。

机上には白紙の用紙。

○高校・保健室（朝）

奏一朗、ゆらりと立ち上がり、碧生が寝ていたベッドを蹴る。

○奏一朗の中学校・廊下（回想）

半醒でふらふら歩く学ラン姿の奏一朗。
何度も他の生徒とぶつかる。

○灰戸家・奏一朗の部屋（回想・深夜）

真っ暗な室内でノートパソコンに向かい、編集作業をする奏一朗。

瞬きひとつせず、ぶつぶつ呟いている。
机上には、コーヒーや栄養ドリンクの
残骸が並んでいる。

○街道シネマズ・シアタールーム（回想）

奏一朗、舞台上で表彰盾を受け取る。
若干ハイになった感じで客席を見渡す。

○街道シネマズ・付近の交差点（回想・夜）

奏一朗、信号待ちをしている。

トートバッグの中にある表彰盾をちらりと覗き見、微かに口角を上げる。

信号が青になり、歩き出そうとする。
直後、視界がぐにやりと歪み、無抵抗にその場に倒れ込む。

騒然となる一帯、遠い救急車の音。

○高校・保健室（朝）

奏一朗、ベッドを蹴りまくる。

○病院・奏一朗の病室（回想・夜）

ベッドの上で座っている奏一朗。

近くに立つ父と母。父は険しい表情で

奏一朗に何かを訴え、母は涙を流している。

奏一朗、心苦しそうに下を向く。

○灰戸家・奏一朗の部屋（回想）

奏一朗、映画の棚を見つめている。

それらを一つずつゴミ袋に捨てていく。

最後に表彰盾を手に取り、名残惜しうに眺めたのち、それも捨てる。

○公立高校・保健室（朝）

奏一朗、ベッドを蹴ろうとして止める。

出入口の方を睨み、拳を握り締め、足早に歩き出す。

○同・屋外通路（朝）

碧生の後方から奏一朗が走ってきて、
彼女の肩を掴む。

碧生、顔だけで振り返り、一瞬驚く。
が、すぐに敵意を瞳に宿し。

碧生「脳みそまでチキンなの？」

奏一朗、息を切らせたまま。

奏一朗「あの日、あの場所に立つまでに、俺
がどれだけ苦しみ抜いたかわかるか？」

碧生「それはあなただけじゃない」

奏一朗「そう、俺は凡人なんだ。だからあの
頃以上に苦しまないと、あれを越すものは
作れない。絶対にだ」

碧生「だったら、そうすればいいだけでしょ」

奏一朗「その姿に心を痛める人がいる」

碧生、何か言いかけた口を閉ざす。

奏一朗「良いもの作れるなら、俺はいくらで
も自分を追い詰められるさ。でもそれは、
人を悲しませてまでやるべきことなのか……
……（手を離して下を向く）わからないんだ」

碧生、奏一朗の方に体を向ける。

奏一朗「健康を意識して、人付き合いを大切に
にして、恋愛をして、ちゃんと寝て、三食
しっかり食べて、風呂も毎日入って……そ
ういう健全な生活を優先して作る俺の映画
は、死ぬほどつまらない」

奏一朗、顔を上げて。

奏一朗「そんな駄作、誰にも見せたくない。
だから作るのをやめた」

碧生、敵意の消えた瞳で。

碧生「その言い方だとまるで、本気を出せば
自分はすごいと主張しているみたい」

奏一朗「結果は嘘をつかない。文句あるか」

碧生、少し考えて。

碧生「ないわ。だけど、お風呂は入りなさい」

奏一朗「今は入ってるよ」

長めの沈黙の後、短く微笑む二人。

奏一朗「あんた、名前は？」

碧生「雛形碧生」

偶然通りかかった男性教師。

男性教師「お前ら、授業中に何をしている！」

奏一朗と碧生、揃って逃げ出す。

○高校・外観（昼）

二人分の足音とチャイムの音。

○高校・自販機前のベンチ（昼）

奏一朗、自販機で飲み物を購入中。

ベンチで息を整えていた碧生、立ち去ろうとするように腰を浮かせる。

奏一朗、「ほら」と缶コーヒーを一本碧生に差し出す。自分の分もある。

少し悩んだのち、碧生はそれを受け取り、座り直す。小声で礼も。

奏一朗「（座りながら）小説は今も？」

碧生「ええ」

奏一朗「商業経験は？」

碧生「まだないわ」

奏一朗「まだ、か」

碧生「新人賞では何度か最終選考まで残って

る。あとは選考員の運だけ」

奏一朗「そう言ってるうちは、一流は程遠い」

碧生「反論の余地もないわね」

コーヒーを飲む二人。

奏一朗「次の新人賞は？」

碧生「今月末に応募べ切の賞が一つある。正直、間に合う気がしないけれど」

奏一朗「そういう状況が一番良い。終わりがあるから人は必死になれる」

碧生「終わりがあから時間追われるわ」

奏一朗「そのジレンマは覆らないさ。活動時間を増やしたいなら、寝なければいい」

碧生「今日は二時間も寝た」

奏一朗「食事は？」

碧生「執筆の片手間に食べれるものを」

奏一朗「……友達との無駄話なんて論外だ」

碧生「人とまともに話すのはいつ振りかしら」
奏一朗「（冗談めかして）だったらもう、息

を止めて時間を止めるしかないな」

碧生、缶コーヒーを落とす。

奏一朗、碧生の方を見てぎよっとする。

奏一朗「何をそんなに驚いているんだ？」

碧生、愕然と奏一朗を見ている。

碧生「今、何て言った？」

奏一朗「ああ、いや、昔そういう設定で映画を作ろうとしたことがあって」

碧生「嘘……」

奏一朗「嘘じゃない。結局作らなかったけど——いや、作れなくなった、か」

碧生「……どうして？」

碧生、切実な眼差し。

奏一朗、真摯な面持ちで彼女を見返し。

奏一朗「二年前、俺は実際にその力を使ったことがあった」

碧生、息を呑む。

奏一朗「夢を追いながら、時間に追われていた時期——『時間をつぶすな』を制作していた頃だ。あの力があったから、俺は途方もない息苦しさと引き換えに、時間を手に入れた。おかげでデイトールまでこだわ

ることができて、結果は知つての通りだ」

碧生「……その過程を映画にしようとした？」

奏一朗、ああ、と手元のコーヒーに目を落とす。

奏一朗「だけど制作に入る前に、力は消えた。

あの授賞式の、すぐ後のことだった」

○病院・奏一朗の病室（回想）

奏一朗、ベッドで横になっている。

傍らで林檎をむいていた母、うつかり

林檎を手から滑り落とす。

奏一朗、咄嗟に息を止める。

しかし時は止まらず、林檎は床に落下。

母が慌てて拾う様子を、奏一朗はただ

愕然と眺めている。

奏一朗の声「天啓だと思ったよ。親を泣かせてまでやることじゃないって、神様に窘められた気分だった」

○公立高校・自販機前（昼）

奏一朗「まあ、こんな話されても反応に困る
だろ」

碧生「そうね……すごく、困惑している」

奏一朗「自分でもそうさ。今思い返しても、
あれは全部夢だったんじゃないかと――」

と、自嘲混じりに碧生の方を見る。

碧生、忽然と姿を消している。

奏一朗「……え（咄然）」

奏一朗、おもむろに立ち上がり、きよ
ろきよろと周囲を見回す。いない。

ふと、背後に碧生の気配を感じ、振り
返る奏一朗。

すでに碧生はいない。

今度はベンチに気配を感じ、反射的に
そちらを見る奏一朗。

すでに碧生はいない。

奏一朗「何が、どうなって……」

碧生「私も驚いている」

自販機の近くに現れた碧生、先ほど落
とした缶をゴミ箱に捨てている。

奏一朗、今度こそ碧生を視界に捉えて。

奏一朗「雛形……お前、何を……」

碧生「あなたと同じ」

碧生、わざとらしく息を吸い、止める。

直後、奏一朗の目と鼻の先に出現。

奏一朗「——うわっ！（と尻もちをつく）」

碧生、手を差し伸べる。

奏一朗、しばらくその手を凝視して。

奏一朗「……そうか。そうだったのか」

段々と不気味な笑顔になる。

奏一朗「映画の神様はまだ、俺を見放しちや
いなかった」

碧生「（怪訝そうに）さっきから何をぶつぶ
つと……」

奏一朗、碧生を見上げて。

奏一朗「映画を作る」

碧生「……いきなりどういう風の吹き回し？」

奏一朗「主役はお前だ。撮影は今月中に済ま
せる」

碧生「意味が解からない、ふざけないで。私

にはコンテストがあると言ったばかりよ」

奏一朗「べ切を過ぎれば力は消える。俺にはわかるんだ。だからその前に撮りたい」

碧生「ただでさえ時間を渴望しているの」

碧生、踵を返し、息を吸いこむ。

奏一朗「頼む、今のお前が必要なんだ」

と、碧生の手をとろうとする。

が、ぎりぎり届かず、碧生は消える。

取り残された奏一朗、地面に寝転んで

天を仰ぐ。

笑いがこみ上げてくる。やや狂氣的。

通りがかった女子ら、ひっ、と避ける。

○同・教室（昼）

奏一朗、映画の構想を進路希望調査票の裏面にまとめている。

友人ら、弁当を持って奏一朗に近寄る。

男友人A「コイツ昨日、駐輪場で彼女とさー」

男友人B「おい、あんま大声で言うなって」

奏一朗、友人らを完全に無視。

○公園（夕）

奏一朗、ベンチに座り、ノートに簡易的な絵コンテを書いている。

時折ニヤつく。

サッカーをしていた少年ら、奏一朗に近寄る。

少年A「そのベンチ、ゴールにしたいから退いて」

奏一朗、無視。

少年A、奏一朗とノートの間で手をひらひら。

奏一朗、ノートを見たまま舌打ちして。

奏一朗「失せろクソガキ」

と、親指である方向を指し示す。

少年ら、そちらを見る。

金網フェンスに『ボール遊び禁止』の張り紙。手作り感満載。

○灰戸家・リビング（夜）

母、テレビを観ながら洗濯物を畳んで

いる。

父、ただいま、と帰宅。仕事着。

母「お疲れ様。ご飯にする？」

父「ああ、頼む（室内を見回し）奏一朗は？」

母「友達とご飯食べてから帰るって」

父「珍しいな、こんな遅くまで」

時計、二十一時を回っている。

○公園（深夜）

奏一朗、街灯に照らされながら、ノ
トにペンを走らせている。

自転車でパトロール中の警官、奏一朗
に気づき、歩み寄る。

警官「君、高校生？」

奏一朗、無視。口元は笑っている。

警官、ええつ、と軽く引いてから。

警官「ちよつと、君！」

奏一朗、ようやく我に返る。

奏一朗「（不機嫌そうに）何ですか」

警官「子どもがこんな時間に外出歩いてちや

駄目でしょ」

奏一朗、スマホの時計を見る。

時刻は日を跨ごうとしているあたり。

奏一朗、やっちゃまった、というふうに額に手を当てる。

○雛形家・碧生の部屋（深夜）

碧生、ノートパソコンに向かってい

が、手が全く動いていない。

唇を噛み、文章の途中で点滅するカー

ソルをじっと見つめている。

碧生「くそっ」

苛立ったように拳を机に振り下ろす。

○灰戸家・リビング（早朝）

父、起きてくる。

台所でぼんやりとコーヒーを飲む奏一

朗に気づき、小さく驚く。

父「どうした、こんな早くに起きて」

奏一朗「（一拍遅れて）おはよう」

父「……もしかして、寝てないのか？」

奏一朗「めっちゃ寝た」

奏一朗、眠そうにリビングを後にする。

○公立高校・碧生の教室→廊下（昼）

委員長の号令で終業の礼をする一同。

碧生、一人足早に教室を後にする。

廊下に出たところで、ふと足を止める。

行く手に奏一朗。その手には謎の紙束。

無視して通り過ぎようとする碧生。

奏一朗、彼女の腕を掴む。

碧生、舌打ちをし、息を止める。

刹那、廊下にいた他の生徒らや空を飛

んでいる鳥など、すべて静止。

そのまま歩き出そうとする碧生。

が、腕を引く力が消えていないことに

気づき、振り返る。

奏一朗、普通に動いている。

碧生「（愕然と）どうして……」

という台詞と同時に、動き出す世界。

奏一朗「時間が止まる瞬間、お前に触れていたいからだ。俺の時もそうだった」

奏一朗、紙束を碧生に差し出す。

表紙のタイトル『DREAM TIME（仮）』

碧生、少し悩んで受け取る。

奏一朗「基本の設定類は全部、お前をベースに構築した。台詞は一切考えていない。お前の言葉で語ってくれ」

碧生、ぱらぱらと中を見、顔を上げる。

碧生「ほとんど私のシーンじゃない」

奏一朗「主人公に主題が詰まっている」

碧生「私には本当に時間がないの。協力するメリットもない」

奏一朗「完成したらどこかの映画祭に出す。

クレジットの原作者は、お前のペンネームだ」

碧生「それが実績になるとでも？」

奏一朗「必ず一番をとる」

碧生、短く嘲笑。

奏一朗「デビューへの道は一つじゃない。だ

つたら今はどう考えても、俺に賭ける方が
賢明だ」

碧生「（目を細め）どういう意味？」

奏一朗「月末まであと半月もない。どうせそ
っちは間に合わないさ」

碧生、紙束をぐしやりと握り、凄む。

碧生「喧嘩売ってる？」

睨み合う二人。

ざわつく周囲。

碧生、奏一朗の瞳を見据えたまま、何
度か小さく頷き。

碧生「いいわ、気が変わった」

奏一朗「引き受けてくれるのか」

碧生「でもあなたの思い通りにはならない」

奏一朗、顔をしかめる。

碧生「その映画はいずれ、ただのドキュメン
タリーになる。タイトルは『ベストセラ―
作家、デビュー作誕生までの軌跡』――そ
れをあなたの遺作にしてあげる」

奏一朗、口元を弧に歪める

○繁華街（夕）

奏一朗と碧生、雑踏の中を並んで歩いている。奏一朗は自転車を押している。

奏一朗「彼女は常々思っていた。日々の中には無駄な時間が多過ぎると。だから、能力に目覚めた彼女は初めに、そういう時間を現実から省略しようと考えたわけだ。例えば……」

碧生「息を止めながらお風呂に入る」

奏一朗「話が早くて助かる」

二人、小広場のベンチに到着。

奏一朗、鞆から小型のスマホスタンドと接続マイクを取り出し、撮影の準備を始める。

碧生「撮影はスマホで？」

奏一朗「スマホはマジでいいぞ」

奏一朗、同じセットをいくつか準備しながら。

奏一朗「彼女には人生において、最も無駄だと感じている時間がある。今から撮るのは、

それを省略する画だ」

○雛形家・碧生の部屋（未明）

碧生、ひたすらにキーボードを叩く。

時計の針が進む音。

○繁華街（夕）

時計の針が進む音。

スマホや腕時計、喫茶店に置かれた砂時計や家電量販店に並ぶ種々雑多な時計など、街中に存在する時計が次々と映し出される。

往来の真ん中に、碧生と奏一朗。

碧生「本気でやるの？」

奏一朗「躊躇う時間も無駄だぞ」

碧生、舌打ちをし、奏一朗と手を繋ぐ。

奏一朗、もう片方の手に持ったスマホのカメラを碧生に向ける。

他の画角にも定点カメラが数台。

奏一朗「用意……アクション！」

碧生、大きく空気を吸いこみ、止める。
刹那、世界は停止し、無音に包まれる。
碧生、奏一朗の手を離し、息を止めた
まま駆け出す。

奏一朗、すぐに自転車に乗って追跡、
撮影。

碧生、止まった人混みをすり抜け、車
道や線路を全力疾走。しだいに表情が
苦しみに満ちていく。

それと比例して、奏一朗の口角が上が
っていく。

○雛形家・碧生の部屋（未明）

碧生、腕組みをしてパソコン画面を睨
んでいる。

○繁華街（夕）

碧生、膝に手をついてハアハア。

奏一朗、近くで撮影データを確認中。

奏一朗「いいね。最高の通学シーンだ」

碧生「（息切れ中）私、バス通学なんだけど」

奏一朗「走る方が、彼女の必死さをより鮮烈に伝えられる」

碧生「作家になるのに、これが必要な苦しみだ？」

奏一朗「作家になればそう思えるさ」

○雛形家・碧生の部屋（未明）

碧生、コーヒーを飲みながらウロウロ。
時折頭を掻きむしり、奇声を発する。

○公立高校・階段踊り場（昼）

奏一朗と碧生、向かい合っている。

碧生「叶えたい夢がある。だから、これ以上あなたとはいられない」

奏一朗「俺との時間は無駄だっていうのか」

碧生「……そうね」

奏一朗、碧生の両肩を掴み。

奏一朗「俺は君と別れたくない」

碧生「ごめんなさい。けどもう――」

二人、ふと気配を感じて階段を向く。

金木が目を丸くして固まっている。

○雛形家・碧生の部屋（未明）

ベッドでうとうとしていた碧生、ふいに何か閃いたように目を見開き、飛び起きる。

パソコンに向かい、ひたすらにキーボードを叩く。気味の悪い笑みを湛えて。

○公立高校・新聞部部室（昼）

碧生と金木、窓辺に並んで立っている。

奏一朗、その様子を撮影している。

金木「作家になるために彼と別れた、か」

碧生、遠い空を眺めている。

金木「私たちはまだ子供だよ。今焦らなくて

も、挑戦する時間はたっぷり残ってる」

碧生「私は一刻も早くデビューしたいの」

金木「どうして？」

碧生「多くの人に注目されて、期待されたい」

金木「（素の顔で）承認欲求強いんだね、君」

碧生、素の顔で金木を睨む。

金木「（小さくお手上げのポーズ）続けて」

碧生「人の行動は環境に大きく左右される。

どれだけ強い意志を持っても、失うも

ののない挑戦には、きっと限界がある」

碧生、再び遠い空を見やり。

碧生「重圧は焦りを生む。それは私にとって、

何よりの原動力になる」

金木「何でそこまで必死になるの？」

碧生「誰もが認める物語を書きたいから」

金木「そのためだったら、周りの人間も簡単に切り捨てられるんだ。恋人も、友達も」

碧生「ええ」

金木、寂しげな瞳で頬笑む。

× × ×

金木、撮影データを確認中の奏一朗に
近寄る。

金木「大丈夫？ ほぼアドリブだったけど」

奏一朗「いい感じ。出演、助かったよ」

金木「いいのいいの。私、一応将来は記者志望だからさ」

奏一朗、小首を傾げる。

金木「大物になりそうな人たちとコネを築いてて、損はないってこと」

○同・空き教室（夕）

碧生、キーボードを叩いている。

パソコン画面、文章の最後に「了」と打ち込まれる。

碧生、椅子にもたれ、深く息をつく。

碧生「終わった」

奏一朗「……は？」

奏一朗、撮影を中断し、パソコン画面を覗き見る。

奏一朗「……え、もう完成？」

碧生「まだ推敲がある。むしろここからが本番」

奏一朗「良かった。まだ撮りたい画があるんだ」

碧生、眉を顰める。

碧生「素材は十分揃ったでしょ。さすがにもう付き合えない」

奏一朗「ファイナーレに、お前が苦しむ姿が欲しい」

碧生、嘘でしょ、という顔をする。

碧生「もう何度も必要以上に苦しんだわ。執筆に行き詰まっても、普通ここまではいない！」

と、苛立ったように室内を示す。

机や椅子が無秩序になぎ倒されている。

碧生「これでも足りない？」

奏一朗「足りない」

碧生「これ以上続けたら気が狂う。はけ口にされる覚悟はある？」

奏一朗「それで気が休まるならそうしてくれ」

碧生、瞬時に息を吸う。

次の瞬間、奏一朗が吹っ飛ぶ。彼が元いた場所には、拳を握り締めた碧生が立っている。

床に横たわった奏一朗、頬を押さえながら碧生を見上げ。

奏一朗「オッケー、じゃあこうしよう。あと一時間でいい」

碧生「今は一秒でも惜しい」

奏一朗「理想の状況だ」

碧生、拳を振り上げるような素振り。

奏一朗「おちよくってるわけじゃない（焦）」

碧生、鼻を鳴らす。

奏一朗「俺はただ、極限まで時間に追い詰められたお前を撮りたいだけだ」

碧生「……わからないわ」

奏一朗「何が」

碧生「あなたがこの映画に固執する理由」

奏一朗、逡巡するように下を向く。

碧生「これを完成させることに、何の意味があるというの」

奏一朗、ゆっくりと深呼吸をして。

奏一朗「少なくとも創作という領域において

は、かけた時間が質を高めると俺は思っている。でも大抵の場合、作品の制作期間には限りがある。だから俺たちは、時に命を削ってでも時間を捻出しようとする」

碧生、奏一朗から目を逸らさない。

奏一朗「だけど、そのやり方を理解しがたい人間だっている。そういう人たちにとって、それは自傷行為にしか見えないらしい」

奏一朗、碧生を見上げる。

奏一朗「それでも俺は、自分が間違っていないことを知りたいんだ。そのためにこの映画を、たくさんの人に観てもらいたい」

碧生「その先に何を求めているの」

奏一朗「肯定がほしい。一人でも多くの」

碧生「……ただの自己満足ね」

奏一朗「いいんだ。それあれば、俺は自信を信念を持って映画作りに専念できる」

碧生「それで、誰かを悲しませることになるとしても？」

奏一朗、真剣な眼差しで頷く。

しばし見つめ合う二人。

碧生「……三十分よ」

奏一朗「え？」

碧生「それ以上は本当に無理」

奏一朗、微かに相好を崩す。

碧生「時間が勿体ない。早く始めましょう」

奏一朗「いや、今日じゃない」

奏一朗、立ち上がり。

奏一朗「撮影日は三月三十一日だ」

碧生、こいつマジか、という顔をする。

○灰戸家・奏一朗の部屋（深夜）

奏一朗、映画の編集作業中。瞬きひと

つせず、パソコン画面を凝視。

時計、午前三時頃。

○コンビニ（深夜）

碧生、プリンターで原稿データを印刷

中。

ふと、みぞおちのあたりを押さえてし

やがみ込む。苦悶の表情。

○公立高校・体育館（昼）

壇上に立つ校長、整列した全校生徒に向かつて話している。

校長「えー、明日から春休みになりますが、事故や事件などに巻き込まれないよう、くれぐれも気をつけて――」

碧生、列の中で一人だけ険しい表情。片手で腹部を握り締めている。

○同・碧生の教室（昼）

担任教師、教壇に立ち、生徒一人ひとりに通知表を返却中。

生徒らは各々に友人と集まり、通知表を見せ合ったり駄弁ったりしている。

碧生、原稿の紙束を机に置き、赤ペンで推敲中。しかし様子がおかしい。

片手で腹部を押さえ、しだいに呼吸が荒くなっていく。額に汗が滲んでいる。

視界はぐにやりと歪んでいる。

担任「次、雛形さん」

碧生、全く聞こえていない様子で、突然口を押えて咳き込む。

碧生の異変に気づいた担任教師と周囲の生徒ら。

担任「雛形さん、どうしたの？ 大丈夫——」

と次の瞬間、碧生は吐血する。

一瞬の後、女子の悲鳴を皮切りに騒然となる室内。

碧生、机にへたり込み、血にまみれた原稿が床に散らばる。

○同・奏一朗の教室（昼）

奏一朗、廊下が騒がしいことに気づく。興奮気味に教室に入って来る友人。

奏一朗「何かあったのか？」

男友人A「やばいぞ。他クラスの女子が、血吐いて救急車で運ばれてった。ほら」

友人、スマホを出して動画を再生する。

碧生が救急車に担ぎ込まれる映像。

奏一朗、息を呑む。

○病院・碧生の病室（夕）

碧生、ベッドで横になり、窓の外を眺めている。

出入口のドアが開き、奏一朗が入室。

碧生の顔を見てホッとした様子。

奏一朗「焦らすなよ」

碧生「胃に穴が空いたくらいで、皆大袈裟なのよ」

奏一朗「入院はいつまで？」

碧生「とりあえず今月はずっとここね」

奏一朗「そうか」

碧生「ええ」

奏一朗「（冗談めかして）じゃあ俺をここへ呼んだのは、映画が撮れなくなったことを詫びるためか？」

碧生「違うわ。あなたのノートパソコンを貸してほしくて。持ってるでしょ？」

奏一朗「持つてるけど、何で？」

碧生「続きを書く。もう時間がない」

奏一朗、ふいに厳しい顔つきになる。

奏一朗「……自分ののは？」

碧生「親に取り上げられた。原因はそれだと、

医者に言われたみたい」

奏一朗「だろうな」

碧生「だからあなたのを貸して」

奏一朗「それはできない」

碧生「私は協力してあげたのに」

奏一朗「駄目なものは駄目だ」

碧生、憤慨した様子で身を起こし、同

時に拳を振り上げる。

しかし、奏一朗は動じない。

奏一朗「一応最後まで書いてはいるんだろ。

それをコンテストに出せばいい」

碧生「あなたがそれを言う？」

奏一朗「……いや、今のは失言だった。言い

直す。今回は諦めろ」

碧生「その意味を理解しているの？」

奏一朗、何も答えず、二人は対照的な
温度差で見つめ合う。

碧生、おもむろに拳を下げ、横になっ
て背を向ける。

碧生「わかった。もう来なくていいわ」

奏一朗、踵を返して病室を出ていく。

○灰戸家・奏一朗の部屋（深夜）

奏一朗、思慮深げな眼差しでパソコン
に向かっている。

画面。高校の空き教室で、机や椅子を
なぎ倒す碧生の映像が流れている。

何度も再生するうち、何かに納得する
ように、小刻みに頷き始める奏一朗。
やがてパソコンを閉じ、少し悩んでか
らケースにしまう。

○同・リビング（早朝）

父、起きてくる。

奏一朗、台所でぼんやりとコーヒーを

飲んでいる。

父「今日も早いな」

奏一朗「（一拍遅れて）おはよう」

父、台所に来てコーヒーを作り始める。

父「最近遅くまで起きてるみたいだな。俺が寝る時にも部屋の電気がついていて」

奏一朗「あー、スマホいじってて気づいたら大体そんな感じ。ドーパミンまじ腹立つわ」

父、呆れたように苦笑。

湯が沸騰していく音だけがしばし響き。

父「作っているのか、映画」

カチ、と湯沸かし器のスイッチが鳴る。

奏一朗、ずずとコーヒーを啜る。表

情は見えない。

父、穏やかな口調のまま。

父「また、倒れるまでやる気か」

奏一朗「……俺、何も言っていないけど」

父「生活習慣が教えてくれるさ」

奏一朗、小さく息をついて。

奏一朗「親父は今でも反対か」

父「まさか。息子の夢を応援しない親がどこにいる。そこは母さんだって同じ気持ちだと、前にも話しただろう」

父、コーヒーに湯を注ぎ、スプーンでかき混ぜる。

父「ただな、その熱量を理解してやることはできない。俺にはそれほど必死になって、何かを成し遂げようとした経験がないからな（コーヒーを一口飲み）それでも、成し遂げたことはある」

奏一朗、父を見る。

父「大切な家族ができた」

奏一朗、コーヒーに目を落とす。

父「お前はできないことがあれば、できるようになるまでやってしまう。その過程では、生への執着すら手放しているように感じられる……だから心配なんだ。いつか本当に、取り返しのつかないことになるんじゃないかと」

奏一朗、少し考え、小さく頷く。

奏一朗「俺が親父でも、きっとそう思う」

父「だろう（小さく笑って）想像は、現実と
いう基盤の上に成り立つべきなんだ」

奏一朗、それには何も答えず、コーヒ
ーカップを傾ける。

しかし中身はすでに空っぽだった。

○病院・通路→碧生の病室（昼）

奏一朗、通路を歩いている。鞆を背負
い、片手にパソコンのケース。

碧生の病室前に到着。

ドアをノックする。が、返事がない。
少し間を置いてから、奏一朗はドアを
スライドする。

瞬間、開放された病室の窓からひと際
強い風が吹き抜け、幾枚もの紙が宙に
舞う。

奏一朗、愕然と目を見開く
視線の先では、碧生が紙にペンを走ら
せている。全力疾走真っ只中のように、

激しく息を切らしながら。

碧生、水に潜る前のように大きく息を吸い、次の瞬間には、水面から顔を出した直後のように一段と激しく呼吸する。その繰り返し。

奏一朗、何かに気づいたようにハッと
して、止めようとするような素振り
で碧生に近づく。

碧生、奏一朗に気づき、目が合う。

が、すぐ前に向き直り、執筆を続ける。

奏一朗、立ち尽くしたまま、碧生の
手の紙を見下ろす。

紙面。奏一朗が瞬きをする度に、
文字があり得ない増え方をする。

奏一朗、しばらく見入っていたが、
だいに口角が上がっていく。

数歩下がり、鞆から撮影セットを
取り出して準備する。その間、一度も
碧生から目を離さない。

何度も時間を止めながら狂氣的に書き

続ける碧生に、奏一朗もまた狂氣的な
笑みを浮かべ、スマホのレンズを向け
る。

○黒画面

ポン、と撮影ボタンが押される音。
タイトルバック『青きレゾナンスの序章』

了